

ア

Her Beaver People カナダの森で』(一九三五)を著している。同書によつてビーバーの一年間の生活記録を知ることができる。自伝に『Pilgrims of the Wild 荒野の旅人』(三四)がある。

(桂有子)

青江舜一郎 一九〇四～八三(明37～昭58)

劇作家、演劇研究家。本名大嶋長三郎。秋田市に生まれ、一九二九年東京帝国大学印度哲学科卒業。在学中戯曲を書きはじめ小山内薫に師事。日本教育紙芝居協会を設立(一九三八)。戯曲『河口』(三七)、『葉舟』

愛子叢書
アーヴィング ワシンطن Washington Irving 一
七八三～一八五九 アメリカの作家。隨筆、旅行記、物語を集めた『スケッチ・ブック』(一八一九～二〇)に含まれる『リップ・ヴァン・ワインクル』は、山の中で一晩寝たつもりが二〇年たつていたという物語で、ド

イツの昔話がもとになつてゐるが、独立戦争前後のアメリカという舞台とみごとに結びついて、新しい伝説となつた。ほかにスペインでの公使館勤務から生まれた『アルハンブラ物語』(三三)がある。

(脇明子)

アーヴルグレイ Grey Owl 一八八八～一九三八 カナダの作家。本名はアーチボルド・S・ビラニー。イギリスより移住後、主に罠猟に従事。第一次大戦から復員後、生命の尊さを痛感し、一転して、鳥獣、とくにビーバーの保護に専念した。野生動物の保護を子どもたちに訴えかける『The Adventures of Sajo and

書に『演劇の本質と人間の形成』(五三)、伝記『龍の星座—内藤湖南のアジア的生涯』(六六)、『竹久夢二』(七二)などがあり、児童劇、学校劇、青年演劇の脚本も数多く、また劇作家の育成に尽力した。

(藤木宏幸)

青木健作 一八八三～一九六四(明16～昭39)

小説家。本名井本健作。山口県都濃郡富田町に生まれ、

一九〇八年東京大学哲学科卒業。千葉県成田中学に勤務。この間に同僚の鈴木三重吉の影響で小説を発表し、新進作家として活躍。また、その関係から「赤い鳥」に童話『啄木鳥』(一九一八)、『水喧嘩』(一九)、『仇討』を執筆。著書に『山鳩』(一〇)、『お絹』(一一)、『若き教師の悩み』(一三)、『青木健作短篇集』(一七)などが

ある。井本農一はその長男。

(根本正義)

青木茂 一八九七～一九八二(明30～昭57)児

童文学作家。東京市芝区麻布本村町(現在の南麻布)に生まれる。父十三郎、母ヨンの長男。四歳の時、父の勤務地の台北に渡ったが、日露戦争による婦女子総引き揚げ命令で東京に戻り、芝白金小から麻布中に進んだ。しかし結核のため中退し、千葉県館山市に転地療養。そのころから絵を描きはじめ、一九一八年日本美術院展に入選。一九一六年大島へスケッチにいき、火山の爆発を夜中に見てファンタスティックなロマン『智と力兄弟の話』を構想し、一九年完成。原稿を山田耕筰に送ったのが縁となり、山田耕筰の序『水晶の歌』、三木露風の序『創造的詩人』の賛辞を巻頭に、初山滋の絵と表題で飾った豪華本『智と力兄弟の話』(青木茂著集) (一九二〇) が新潮社から刊行。この作品は戦後さらに加筆改稿されて、「少年少女」に五〇年一一月号から五一年一二月号まで連載された。大正期の作品には『瘦牛』(一九〇・四「金の船」)、『詩人の夢』(一九〇・六「おとぎの世界」)、『虫のお医者』(一九一・一「赤い鳥」)などがある。関東大震災の際、救護班を組織して独学の医学知識を使って活躍。その後福島県原町の父の会社の染色工場に勤めたり世田谷区深沢町で農園を経営したりする。三一年「童話文学」同人となり、四四年『大空の鏡』刊。この年町工場をつくり、その製品が技術院最高賞を受賞。終戦後も海水の無菌瀘過などユニークな研究を行う。四六年、作品集『大海の口笛』刊。同年「赤とんぼ」

創刊号に『田園都市』、八月号に『かつば三太』、一一月号に『三太と月世界』を発表。以後三太物語を続々と発表。四八年の『物語三太武勇伝』となる。五〇年一月NHKラジオ放送『三太物語』(筒井敬介脚色)はじめ。「おらあ三太だ」にはじまる明るい連続放送劇は子どもから大人までの人気を集めた。『小説三太物語』(五一)、『三太の日記』(五五)、『三太物語・天幕旅行海の巻』(五八)、『三太物語・湖水キャシップの巻』(五六)、『三太の夏休み』(七〇)とシリーズは続き、三太物語は青木茂の代表作となつた。六七年日本文芸家協会より感謝状を受け、七四年久留島武彦文化賞を受ける。

『三太物語』(さんたもの語) 長編児童文学。敗戦直後の相模湖に近い山あいの村を舞台に、子どもたちと花荻先生を中心に戸人たちが引き起こすいろいろな事件や村の暮らしぶりが、わんぱくだが愛すべき少年三太の目を通して生き生きと語られる。明朗で愉快な物語。戦後の荒れすきんだ世相に「何とか清らかな笑いを」と願つた作者は、軽妙な文體で、豊かな自然の中に生きる人々をほほえましく描き出している。当時、国民文学的児童文学の代表作といわれた。

【参考文献】藤田圭雄「青木茂解説」(一九七七『日本児童文学大系12』ほるぷ出版)

青木存義(あおき ながよし) 一八七九~一九三五(明治12~昭10)
(西田良子)

国文学者、唱歌作詞家。宮城県に生まれ、東京大学卒

業。東京音楽学校教授、文部省図書監修官を歴任。文部省唱歌の多くは作詞者作曲者を不明とするが、『尋常小学唱歌(一)』(一九一〇)所収の『菊の花』は青木の作品である。また『かわいい唱歌』(二二)中の『どんぐりころころ』(梁田貞曲)は、一九四七年文部省発行の『二年生のおんがく』に採択され広く歌われた。^{*}(佐藤光一)

赤い鳥

あかいとり

赤い鳥の本

りあいのほん

「赤い鳥」に発表された童話、童謡、児童劇を作家別にまとめた叢書。全一五巻。一九二〇年一一月、一九二七年三月。赤い鳥社。はじめ「赤い鳥の本」として一三冊を関東大震災まで刊行。震災後、「赤い鳥叢書」と改称し、新たに二冊を加えて復刊し完結。鈴木三重吉の『古事記物語』上・下(一九二〇)、小川未明の『小さな草と太陽』(一九二一)、西条八十の童謡集『鸚鵡と時計』(一九二二)などのほか、菊池寛、久保田万太郎、小山内薰、宇野浩一、楠山正雄、江口涣、長田秀雄、宮原晃一郎、豊島与志雄ら文壇作家の作品を集めた意義は大きい。六九年にほるぶ出版から『赤い鳥』童謡とともに復刻された。

(根本正義)

赤川武助 一九〇六年四月(明治三十九年)昭和二九年。児童文学学者。島根県益田市生まれ。国学院大学中退。大衆児童文学作家として、ほとんどの児童雑誌に多くの長短編を発表する。デ・アミーチス『クーオレ』中の『母を尋ねて三千里』の翻案、『源吾旅日記』(一九三八年「少年俱楽部」連載)で注目された後、中國戦線に出征の体験から得た『僕の戦場日記』(一九三八年)により野間児童文芸奨励賞を受けるなど戦争の時代を描いた作が多い。戦後は冒險、動物ものに転じ、『少年密林王』(一九三九年)、『緑の山河』(一九三九年「少年俱楽部」連載)が最後の作品となつた。

(西沢正太郎)

赤木由子 一九二七年(昭和二年)児童文学作家。あかぎよしこ。一九二七年(昭和二年)児童文学作家。あかぎよしこ。

作家。本名千代谷菊。山形県鶴岡市生まれ。小学一年から満州の兄のもとで暮らし、鞍山市の常盤高女を卒業。現地で日本の中中国支配の実態や中国人への差別と、中国人の強さや優しさを体験的に知つたことが、何よりも戦争や差別を否定するというその思想の基盤となつた。一九四六年に引き揚げ、厳しい生活の中で、児童文業界誌の記者などの仕事や育児のかたわら文学や社会問題の勉強を続けた。六六年、『柳のわたとぶ国』(一九八〇年に『二つの国物語』第一部となる)によって児童文學作家として出発した。続く『はだかの天使』(一九六九)は、知恵遅れの男の子を中心に、特殊学級の問題を取りあげたもので、児童福祉文化奨励賞を受賞。障害児を中心とした作品には、『美しいぼくらの手』(一九七四)、『大ちゃんの門出』(一九八二)などもある。親に売られた少年の遍歴を語った『草の根こそざう仙吉』(一九七八)は、野間児童文芸推奨作となつた。代表作『二つの国物語』全三巻(一九八〇~一九八一)は、ヨリ子という少女の渡満から帰国までをダイナミックに描いた自伝的大河小説で、日中戦争を子どもの視点で捉えた作品でもある。このほか、社会問題や教育問題を現代の子どもたちとその生活の中で捉えた作品が多く、リアリズムによる社会派を代表する作家の一人である。

(長谷川潮)

赤座憲久 一九二七年(昭和二年)児童文学作家。あかざひさき。一九二七年(昭和二年)児童文学作家。あかざひさき。

学作家。岐阜県に生まれる。岐阜師範卒業、敗戦後小

学校教師、盲学校教師を経て現在大垣女子短大教授。一七年に及ぶ盲学校教師の体験は赤座作品の第一の柱となつた。一九六二年毎日出版文化賞を受けた『目の見えぬ子ら』、六四年講談社児童文学新人賞を得た『白ステッキの歌』、敗戦の混乱の中のハルビンを舞台にした『いつせいに花咲く街』(一九七四)などは、盲学校教師であつた著者の子どもたちとの熱い共感の中で生まれた記録および文学である。「見えるものの目に映らないことをいろいろと私に教えてくれた生徒たち」と著者は述べている。赤座作品の次の柱はヒューマンな立場からの反戦平和への思いであろう。「満州事変」のことが、わたしのものごころついたところにおき、わたしはいやな歴史とともに育つたようなものです」と述べる著者は『砂の音はとうさんの声』(七八)、「兵隊はあさん』(八一)、『関ヶ原火薬庫物語』(八二)など多くの作品がある。七〇年郷土の先輩や仲間と子どものためのユニークな月刊誌、「コボたち」を発行、地域の児童誌として高い評価を受けている。郷土の歴史風土に根ざした作品として『新島の飛驒んじい』(七七)、「しらさぎ山のクマたち』(七五)などがある。この作者の三つの柱がそれである。

赤塚不二夫

ふじおか
一九三五(昭10) 漫画

(しかたしん)

家。本名藤雄。満州の熱河省承德市に生まれ、一九五六年新潟県西蒲原郡四ツ谷中学校卒業。上京後、工員

として働くかたわら、漫画家をめざす。五六年、單行本『嵐をこえて』でデビュー。少年週刊誌に『おそ松くん』(一九六二)、『もーれつア太郎』(六七)、『天才バカボン』(六七)などを連載。テンポの速い独特的のナンセンス・ギャグの世界を切り開き、「シェー」「ニヤロメ」などの流行語を生み出した。

赤とんぼ

あかと
一九四六年(昭21)四月—一九四八年(昭23)一〇月。発行所は実業之日本社。大仏次郎、川端康成、岸田国士、豊島与志雄、野上弥生子らの協力のもとに藤田圭雄を編集長として、敗戦の翌年「子供の広場」と並んで戦後いち早く創刊された、A5判の月刊児童文学雑誌。「どん底に落ちた日本を美と力に満ちた国に作り上げて行かねばならぬ今の子供たちに(中略)暖い心と正しい判断力を持つた人間にするやうに、あらゆる努力も傾倒したいと思つてゐる。大正の頃鈴木三重吉氏によつて主唱された赤い鳥の運動をわれわれはまだ昨日のことのやうに覚えてゐる」と「創刊のことば」にあるように、「赤い鳥」継承を試みた雑誌であつたといえよう。豊島与志雄、大仏次郎、川端康成、小川未明、サトウハチローらが執筆。代表作品に、壺井栄『ヤツチヤン』、塚原健一郎『たらい』、竹山道雄『ビルマの豊琴』、青木茂『三太もの』の短編連作などがある。

赤羽末吉

あかば
すえきち

一九一〇(明43) 絵本作家。

(五十嵐康夫)

東京の神田に生まれる。一九三二年旧満州に渡る。初^{*}山滋の「コドモノクニ」に出会い、絵筆を執る。幼いころ見た紙芝居と様式の似る中国の影絵人形芝居に心惹かれ、小冊子『影絵芝居の話』(一九四〇)を処女出版。満州国展特選賞三回。四七年帰国。四九年からアメリカ民間情報教育局に勤務のかたわら、日本独自の絵本の方向を研究。六一年処女作『かさじぞう』出版。『だいくとおにろく』(六二)、『ゆかいなきつちょむさん』(六三)、『白いりゅう黒いりゅう』(六四)、『ももたろう』(六五)、『スーホの白い馬』『はなさかじじ』(六七)、『ほうまん池のカッパ』(七五)、『ほしになつたりゅうのきば』(七六)などで茂田井賞、サンケイ児童出版文化賞、毎日出版文化賞団体賞、児童福祉文化奨励賞、講談社出版文化賞絵本賞、ブルックリン美術館絵本賞、国際アンデルセン賞など数多く受賞。大和絵的な世界と墨絵の世界の中に、日本の美を見いだし、絵本で発展を試みる。また六一年以来、西川鯉三郎の舞踊劇の舞台美術も手がける。随想集に『絵本よもやま話』(七九)がある。

赤

本

ほん

(近藤あき子)

赤本絵本

えほんほん

阿川弘之 あがわゆき 一九二〇〇（大9） 小説家。

広島市に生まれ、一九四一年東京帝国大学国文科を卒業後、予備学生として海軍に入る。小説に『雲の墓標』（一九五六）、『山本五十六』（六五）など。児童文学の創作では『きかんしやえもん』（五九）、『なかよし特急』（五九）などがあり、後者は第七回産経児童出版文化賞（六〇）を受賞。翻訳には『グレアム・グリーンの乗りもの絵本』シリーズなどがある。大の乗り物マニアとしても知られる。芸術院会員。
(上田信道)

秋田雨雀 あきたうじやく 一八八三（一九六二（明16～昭37）

劇作家、童話作家。本名徳三。青森県黒石市に生まれる。一九〇七年、早稲田大学英文科卒。翌年、恩師の島村抱月の推薦により、小説『同性の恋』を「早稲田

文学』六月号に発表、ついで、二一年、それまでに発表した小説と戯曲一〇編を収録した『幻影と夜曲』を刊行。翌年、戯曲『埋もれた春』を発表。『早稻田文学』四月号劇作家として認められた。以後、小説、戯曲、詩、童話、評論、翻訳と幅広く才能を發揮するが、一三年、島村抱月主宰の劇団「芸術座」の運営に参加してからは劇作と新劇運動が仕事の中心となつた。また、時代思潮の影響を受けマルキシズムに傾斜し、一七年、訪ソ後はプロレタリア文化運動の推進に努力し、太平洋戦争中も良心的知識人として終始した。戦後は参議院議員選挙に青森地方区に立候補し落選。俳優養成の舞台芸術学院院長。日本児童文学者協会会長に推されるなど民主的文化運動の長老として敬愛されつつ六二年五月一二日七九歳の生涯を終えた。児童文学とのかわりは古く、一〇年、『老人と笛』を『日本少年』三月号発表にはじまり死去までに一三〇編の作品を生んでいる。しかし、活動の中心は大正中期で、一八年には五編(うち「赤い鳥」に二編)、翌年は、「旅人と提灯」ほか八編を「早稻田文学」その他に発表。二〇年には、当時の雨雀の童話観を示す評論『永遠の子供』(童話の成因について)、「胎盤」創刊号を発表。翌年には、既发表の作品をまとめた第一童話集『東の子供』、第二童話集『太陽と花園』の二冊を世に送った。それらの作品は、雨雀の持論である文学の一形式としての童話で

読者を子どもに限定したものではなかつた。その後、永らく童話創作から離れるが、第二次大戦後に至つて意欲が再燃し三〇編の作品を発表しているがそのほとんどは再話、思い出話で純粹の創作は『ゆび人形の世界』(一九五〇)、『一郎とにぎりめし』(五一)で、子どもを読者対象とした生活童話の系列の作品である。評論もいくつかあるが、最もまとまつたものは、『児童文学の創造—展望と将来』(五三『文学の創造と鑑賞』)である。

「太陽と花園」はなそよと 童話。雨雀の大正期の代表作。一九二〇年二月号の「婦人公論」に発表。のち同名の単行本に収録。作者自身「むしろ大人に与えるために書いた」とする童話で、菊の畠をもつて主人公は他人の意見に流されてコスモス、ダリア、大根のいずれを植えるか迷いもとの菊を植えたが醜い花しか咲かなかつた。当時のインテリが社会の風潮に流され自己を失つている状況への批判が込められている。

【参考文献】藤田龍雄『秋田雨雀研究』(一九七一 津軽書房)
 「秋田雨雀・その全仕事」全二巻(一九七五 秋田雨雀研究会)
 『雨雀自伝』(一九五三 新評論社)、『秋田雨雀日記』全五巻(一九六五~六七 未来社)、藤田龍雄『秋田雨雀解説』(一九七七『日本児童文学大系12』ほるぶ出版)
 (塚原亮二)
 秋月桂太こうげいたけいづき 一九〇六~七九(明39~昭54) 創劇作家
 家。本名浩靈。新潟出身。法政大学英文科中退、小学

校教員。一九四二年、情報局總裁賞受賞の戯曲『耕す人』が出世作に。日本移動演劇連盟理事。日本少国民文化協会主催の少国民演劇教室で『あかつき』などを上演（一九四三）。戦後、NHK専属ライターとして『光を掲げた人々』『ラジオ小劇場』など執筆。日本演劇協会理事。新派『路地のあけくれ』『母の上京』、新児童劇団『野の鳥山の鳥』（五三）上演。児童劇集『青空の子供たち』（四七）などもある。

（田島義雄）

秋庭俊彦あきば

一八八五—一九六五（明18—昭40）

ロシア文学者、俳人。東京生まれ。一九一〇年、早稲田大学英文科卒業。短歌を志し、一時新詩社同人となるが、チエーホフに傾倒し、その翻訳紹介に打ち込む。新潮社版『チエーホフ全集』全一〇巻のうち、一、三、四、七、八、九の各巻を担当。昭和に入つてからは句作に専念。句集『果樹』（一九六二）がある。児童文学関係では『赤い鳥』に『バーデロ』（一四・一〇）、『クリスマス』（一四・一二）、『人間鳥』（一五・四）を発表。

（三井喜美子）

阿貴良一あきら 一九一—（明44—）作家、

劇作家、画家。本名江口章。岡山生まれ。一九三三年大阪童話教育研究会に参加、NHK大阪で台本執筆。

三五年劇団ドオゲキ創立、美術・文芸部長。三九年上

京、日本児童劇協会年刊『日本児童劇名作選』に『友達』を発表、出版社勤務のかたわら創作。五一—五七

年日本児童劇作家協会事務局長。学校劇脚本、ラジオ台本などの執筆多数。短編集『東京の匂ひ』（一九四一）、長編童話『家のない子の心になつて』（七〇）などがある。絵画グループ日の会会員。

（田島義雄）

秋玲二あきれいじ 一九一〇—（明43—）漫画家。

本名古川善男。佐賀県唐津生まれ。東京市教員講習所卒。学習漫画の分野で活躍。「東京日々小学生新聞」に、

一九三九年四月より『勉強まんが』を連載、その後学習雑誌に連載する。八七年現在、「毎日小学生新聞」に引き続き『勉強まんが』を連載中。日本漫画家協会名誉会員。主な作品、『勉強まんが』『サイエンス君の世界旅行』（小学館漫画賞受賞）、『日本のんびり旅行』（日本漫画家協会漫画賞審査員特別賞受賞）など。

（山口佳子）

悪書追放運動あくしょつい 一九五〇年代の子ども漫画の流行の中で、冒險活劇・柔剣道ものの子どもに与える悪影響が憂慮され、これを悪書として追放しようとした運動をいう。そのため出版界では出版倫理綱要の

制定、地方自治体では青少年保護育成条例の制定、一般には「読まない・見せない・売らない」の三ない運動などが行われた。反面、子どもによい本をの運動も起り家庭文庫開設、親子読書運動の起る契機ともなった。

芥川也寸志あくわぢ 一九二五—（大14—）作曲家、指揮者。芥川龍之介の三男として、東京田端に生

（小河内芳子）

まれた。父は彼が二歳の時自殺。父が集めた洋楽のコードを好んで聴いて育ったという。一九四七年、東京音楽学校卒業。日本音楽著作権協会理事長など、各種要職にありながら、アマチュアオーケストラの育成、テレビ出演など、作曲以外でも幅広い活躍を続けていた。『きゅつときゅつときゅう』『ぶらんこ』『小鳥のうた』『こおろぎ』など、童謡の名曲もつくっている。

(小山章三)

芥川龍之介 あくたがわゆうすけ 一八九二—一九二七(明25—昭2) 小説家。東京の生まれ。府立三中、第一高等学校を経て、東京大学英文科卒業。大学在学中の一九一六年(大5)、久米正雄・松岡譲・菊池寛・成瀬正一らと第四次「新思潮」をはじめ、創刊号に載せた『鼻』が夏目漱石の激賞を受け、文壇に登場した。一七年第一短編小説集『羅生門』を刊行。続いて『地獄變』『奉教人の死』『南京の基督』『藪の中』などの力作を発表、人気作家となる。が、健康の衰えと芸術上の行き詰まりから二七年七月自決。遺稿に『歯車』『或阿呆の一生』などがあつた。芥川には未完成作品一つを含めて九編の童話がある。その全文業中に占める割合はわずかとはいえる、各作品は虚構を最大限に生かした物語性の豊かさに特徴をもつ。彼の童話の処女作は、一八年七月の『赤い鳥』創刊号に寄せた『蜘蛛の糸』である。以後『犬と笛』『魔術』『杜子春』『アゲニの神』と『赤い鳥』には五つの童話が載つた。ほかに婦人雑誌その他に寄稿した『三つの宝』『仙人』『白』があり、『三つの指環』は未完である。芥川と童話とのかかわりは、大學の先輩で漱石門下の兄弟子であった鈴木三重吉の勧めによる。三重吉は児童雑誌『赤い鳥』を主宰し、童話・童謡の革新をめざして文壇作家の協力を求めたのである。芥川はそれに応じ、右の五つの作品を書くことになる。彼の童話創作は、自らの資質が童話に適していたとか、愛着や使命感あつてのものではなかつた。その点同時代作家の宇野浩二や豊島与志雄が強い愛着をもつて積極的に童話の創作に向かつたのとは異なつていた。この二人はともに夢見る資質があり、その小説で実現できなかつたことを童話の世界に託していたのである。が、芥川の場合、童話はあくまで読者対象の違いとしてのみ意識されるに過ぎず、独自の童話観があるでもなかつた。そつはいつても龍之介童話には、その小説にみられる皮肉や冷徹な觀察眼は少ない。しかも『杜子春』や『白』の結末のように、明るい展望を示すものもあり、子どもの読み物を書くことにに対するたたかな省察が存する。歴後童話集『三つの宝』(一九二八)が刊行された。

『蜘蛛の糸』いとも 短編童話。初出一九一八年七月『赤い鳥』。初出は鈴木三重吉の朱筆が大幅に加わつてある。歴後刊行された第一回全集で原稿通りに戻す。健人

陀多^{だた}という極悪人が、生前一度もを救つたことがあつたため、お糸巡様の慈悲で地獄から救われることになる。が、自分一人だけ助かりたいというエゴイズムによつて、再び地獄の血の池へ戻されてしまう。ポール・ケーラスの『カルマ』が素材であるが、それを自家薬籠中のものとし、物語性に満ちた童話をつくりあげているところに、芥川の力量を見いだすことができるのである。

【参考文献】恩田逸夫『芥川龍之介の年少文学』(一九五〇・一〇)

「明治大正文学研究」14号、村松定孝『芥川龍之介』(一九七一)

日本児童文学学会編『日本の児童文学作家』(まるぶ出版)、佐藤泰正『芥川龍之介の児童文学――『蜘蛛の糸』小論』(一九七一)

一一『国文学』、三好行雄『芥川龍之介解説』(一九七七)『日本児童文学体系12』(まるぶ出版)

(関口安義)

阿久根治子^{あくね} はるこ 一九三三(昭和八)児童文

学作家、童謡詩人。名古屋市出身、一九五四年愛知県

立女子短大国文科卒業。中部児童文学学会所属。処女作

『モクモク町のある一年』(一九六〇)。代表作『やまとたける』(六九)は専門の古代文学を素材とし、第一六回

サンケイ児童出版文化賞を受賞。『少年の橋』(八〇)は現代を背景とした作品である。初期には詩人としても活躍、NHKみんなのうた『星の実』(六九)、『高山に

カンカコカン』(七〇)などがある。

(深谷禮子)

悪魔^{あくま} 悪魔^{あくま} デモン、デヴィル。ギリシア神話では、悪魔^{あくま} デモン、デヴィル。ギリシア神話では、

物語の中に多く見られる。

(井村君江)

アーサー王伝説

アーサーおう

ウエールズの伝説中の英

雄アーサー王の武勇とその死、その勇敢な部下円卓の

騎士ガウエイン、ガラハッド、パルジファルなどがキ

リストが十字架上で流した血を受けたといわれる聖杯

を探求する挿話、魔法使いマーリンの物語などさまざま

な物語が含まれている。ウェールズのアーサー王伝

説は『Mabinogion マビノギオン』としてまとまっているが、一方イギリスのアーサー王伝説は一二世紀初頭

モンマスのジョフリーが書いた『History of the Kings of Britain ブリテン王の歴史』によつて形成されたとい

う。一二、一三世紀ごろにはアーサー王に関する一

群の物語が欧州各国に行われていたが、英語による散

文、韻文の物語が多く現れたのは一三世紀から一五世

紀であった。しかし今日までその伝説が生き残ったのは、トーマス・マロリーの『Le Morte Darthur アー

サー王の死』(一四八五)によるところが大である。若い

読者のためにこの伝説がしきりに書き直されるようになつたのは、一九世紀の半ばからであり、とくに英米で多くの作品が生まれた。二〇世紀になると、パイル(米)の『King Arthur and His Knights アーサー王と騎士たちの物語』(一九〇三)やT・H・ホワイト(米)の『石にさざる短剣』(三八)のような優れた例がみられ

るようになつたが、第二次大戦後にはメイン(英)の『地

に消える少年鼓手』(六六)やディキンソン(英)の『過去にもどされた国』(六八)などのように伝説を利用しながら独創的なファンタジーにしたてる作家も現れている。

朝倉

摂

あさくら

一九二二—

(大11—)

画家、舞

台美術家、絵本画家。本姓富沢。東京都に生まれる。

絵本の絵に、『りゅうぐうのおよめさん』(一九六七)、

『うりこひめとあまんじやく』(六八)、『ゆきおんな』

(六九)、『ゆきむすめ』(七〇)、『スイッチョねこ』(七

一)、『えどのあねさま』(七五)など。童話の挿絵に、『三

月ひなの月』(六三)。絵は日本画家的手法の女性らしい

画風。上村松園賞、講談社出版文化賞を受賞。彫刻家

朝倉文夫の長女。

浅野建二

けんじ

(井上共子)

浅野歳郎

あさの

としろう

一八九八—一九六一(明31—昭36)

児童演劇運動家、劇作家。広島県尾道市に生まれる。

早稲田大学文学部中退。一三世守田勘弥設立の「文芸座」の文芸・演出部員として演劇青年時代を送り、一九三一年、「アサノ児童劇学校」を創立して、子どもの演劇活動の指導と児童劇団活動をする。第二次大戦後は栃木県那須に財團法人日本教育演劇道場らくりん座を創立、歿後は遺族が継承、劇団活動を続けている。

『教育演劇・理論と実際』(一九四八)、『演劇仮面の作り方』(四八)、『学校劇集・天狗峠』(四九)などの著書がある。

浅原鏡村

(あさはらきょうそん)

(富田博之)

小説家。本名六朗、長野県に生まれる。一九一九年早稲田大学英文科卒業。日本大学芸術学部教授。一九四月、『鳥籠』を「大観」に発表、処女作となる。その年実業之日本社に入社。「少女の友」の記者となり、鏡村の号で小説『海岸の教会堂』、童謡『てるてる坊主』などを載せた。編集長となり「婦人世界」も兼務、二八年同社を退き、牧野信一、下村千秋らと同人誌「十三人」を創刊、その後「不同調」、「近代生活」の同人、新興芸術派として活躍したが、やがて批判的となり新社会派を提唱し、評論にも才をふるつた。「てるてる坊主」の碑が、松本城山公園と池田町に建っている。

(西條和子)

学、コレージュ・ド・フランス、コロンビア大学の教授。アカデミー会員。比較文学研究の創始者で学術論文が多い。比較文学の視点からヨーロッパ各国の児童文学の特色を研究し、一九三二年、名著『本・子ども・大人』を刊。彼は、ヨーロッパを北方と南方に分け、児童文学にかぎり想像力の質と子どもの遇され方の違いから北方が南方に優越していると論じた。(塚原亮二)

アサレ メシャック Meschack Asare

(一九四五)

ガーナの絵本作家、教育者、画家、彫刻家。絵本作品には、ユネスコやガーナの最良図書賞を受けた『Tavia Goes to Sea タヴィイア海へ行く』(一九七〇)、『Mansa Helps at Home マンザのおてつだい』(七一)、野間アフリカ出版賞を獲得した『The Brassman's Secret 金工少年のひみつ』(八二)などがある。厳しい環境や制作条件の中で、次々と質の高い作品を生み出していることは驚嘆に値する。ガーナの伝統文化を国内外に紹介することにも力を注いでいる。

蘆田恵之助

(あしだすけ)

(一八七三～一九五一)

(明6～昭26)

アザール ポール Paul Hazard 一八七八～一九四四 フランスの文学史家。高等師範学校卒業後、パリ大

学、コレージュ・ド・フランス、コロンビア大学の教導を退官後、自ら授業を行い、国語教師を指導した。児童読み物にも関心を示し、金港堂から『試験やすみ』

(一九〇三)、文部省の教材懸賞募集(〇六)に入選した『小園長』(〇八『教訓作物語』所収)は農村再建美談である。このほか『学童暑中休暇日誌』(〇八)、『綴方十二ヶ月』五冊(一七~一九)がある。

味戸ケイコ（あじと） 一九四三~(昭18) 画家。本名吉村ケイコ。函館市に生まれ、多摩美術大学卒業。

雑誌「終末から」にイラストを書き出す。舟崎克彦の文による絵本が多く『あのこがみえる』(一九七五)で、ボローニア国際図書展グラフィック賞推薦を受ける。

安房直子とのコンビも多く『花のにおう町』(八三)ほかがある。沈んだ色調で、幻想的自然の中に幼女を描き、現代の思春期の少女たちに愛好されている。自著として『光のオルガン』(八三)がある。雑誌「詩とメルヘン」などの装丁そのほかを幅広く手がけている。(草野明子)

蘆谷蘆村（あしや） 一八八六~一九四五(明19~昭20)児童文学研究者、児童文化運動家。本名重常。島根県松江市に生まれる。童話、エッセイなどの著作には号蘆村を用い、研究的著作や論文には本名重常を用いた。父重教は栃木県日光生まれで、栃木師範を卒業した教育者だったが、事情があつて一時期、島根県の教職についていた。蘆村は、その時期に生まれているので、生地は島根だが、蘆村一二歳の一八九八年に、視学や尋常高等小学校長などを歴任する父とともに栃木県に帰り、少年期を栃木で過ごしている。こうした出身の

事情は蘆村文集『童心の小窓』(一九一九)に詳しい。その家系と生い立ちが、蘆村を、児童文学研究や児童文化運動に向かわせたものとみてよいだろう。栃木県の小学校を卒業後、上京して国民英学会、聖書学院に学んだが、聖職者の道には進まず、蒲原有明に私淑して詩をつくり、有明の序文のある詩集『ああ青春』(〇九)を出し、二〇代のはじめから数種の教育雑誌や少年向け雑誌の編集者を務めた。二〇代の半ばから児童読み物の創作と研究に関心を深め、一九一二年には竹貫佳水らと、我が国における最初の児童文学研究団体となる「少年文学研究会」を結成して、児童文学者の自立と、児童文学研究の必要性を提唱。それとともに、『教育的応用を童話の研究』(一二三)、「童話及び伝説による現れられたる空想の研究』(一四)を続けて上梓した。これらは我が国の児童文学研究の先駆となつた。その後、二二年に「日本童話協会」を創立し、機関誌「童話研究」に拠つて、口演童話をを中心とする児童文化運動を全国的規模で推進することに尽力。『童話学』(二二)、「大童話家の生涯—アンダーセン伝』(三五)、「世界童話研究」(三八)など数多くの児童文学研究書と、『天国の方へ』(二〇)、「美しい国へ』(二二)などをはじめとする多くの童話集、児童読み物を刊行、「童話教育」を提唱して、教育界にも大きな影響を与えた。第二次大戦敗戦直後の四五年一〇月一五日、疎開地の青森県南津軽郡碇ヶ関村で死去。東京

都豊島区稚司谷に「蘆谷重常童心碑」(五八、設立)がある。

【教育的応用を主としたる童話の研究】

どうわのけんきゅう

一九二三年刊、勧業書院。

数多い蘆村の児童文学研究書の最初の一冊で、我が國の近代的な児童文学研究書としても、岸辺福雄の『お伽噺仕方の理論と実際』(一九〇九)につぐ先駆的位置をしめる。児童心理学と教育学の立場からの童話研究に力点がおかれていたのが特徴で、わが国の児童文学研究の初期の状況を反映したものとみてよいだろう。一九一二年に発足した、わが国最初の児童文学研究団体・「少年文学研究会」に理論的根拠を与えたとみられる。

(富田博之)

アシュリー・バーナード Bernard Ashley 一九三五年イギリスの児童文学作家。ロンドンでの教師生活をきっかけにして、労働者階級の子どもを中心に行きつかけにして、人種差別、いじめなどに焦点を当てた作品を生み出した。その出発点となつた『ドノバン・クロフト騒動』(一九七四)以降、『かたきうち』(七八)、『ダッジム』(八一)など、リアリズムの手法にのつとつて、親の離婚や家庭問題を抱える子どもたちの状況を描いた一連の問題小説を手がけている。

(早川敦子)

アスピルンセン ペーテル クリストン Peter Christen Asbjørnsen 一八一二一八五ノルウェーの民話作家。一八一四年にデンマークから独立した大

ウェーは、七〇年代の産業革命に至るまで、自国の文化や言語的特徴を再評価しようという民族ロマン主義の文化運動が盛んになつた。アスピルンセンはモーと共著で、『Norske Folkeeventyr』ノルウェー民話集(一八四一~四四)を出版し、この運動の旗手となつた。この民話集には、それまで口承されてきた、いかにもノルウェー的な民話が数多く収録されている。単独で出版した『Norske Huldraeventyr og Folkesagn』ノルウェー妖精民話と伝説(四五、四七)には、山深いノルウェー独特の民話や伝説が収められ、言語的にもノルウェー方言が意識的に多用され、当時のノルウェー人に自国の文化を再認識させるという大きな役割を果たすとともに、デンマーク語色を脱した書きことばの確立に大きく貢献したという点でも非常に興味深い作品となつてている。

(山口卓文)

足立巻一 けんいちら 一九一三一八五(大2~昭60)

詩人。東京市神田区に生まれ、神宮皇學館卒。一九四六年新大阪新聞社に入社、学芸部長、社会部長などを歴任。その間詩集『夕刊流星号』(一九八二)を出し、本居宣庭の評伝『やちまた』上・下(七四)で芸術選奨文部大臣賞を受ける。児童文学における仕事としては、四七年より子ども詩雑誌『きりん』の編集に参加、回想的な児童詩論『子ども詩人たち』『詩のアルバム』(以上七九)などがあり、『立川文庫』研究に画期をもたらした大

衆文化研究に『忍術』(五七)がある。

(岡本光弘)

足立 勤 あだち つとむ 一八九八—一九四五(明31—昭20) 関西における児童文化運動の開拓者の一人であり、指導者。夢庵と号す。静岡県浜松市生まれ。一九二六年大阪中央放送局(現NHK)に入局。子ども向き番組の編成担当者となる。三二年大阪童話教育研究会が創設されるが、その中心人物であり、数々の逸材を育てる。

退職後、戦争末期に「大阪市子ども文化の会」を結成、専務となり、遺族孤児、集団疎開児などの問題に取り組むも、郷里にて爆死。

(岡本光弘)

アダムス リチャード Richard Adams 一九二〇—

イギリスの作家。長年にわたる公務員生活を経て執筆活動に入る。処女作『ウォーターシップ・ダウンのうさぎたち』(一九七二)で世界的な名声を得る。安住の地を求めて放浪するうさぎたちの冒險を中心となつて展開されるこの物語は、悪漢小説的な種の寓意文学と評される。また人間の姿が重ね合わされ擬人化される一方で、うさぎの描写には、シートンにも影響を受けたといわれるよう、生態学的な視点も同時に感じられる。大きな熊が登場し、人間の残酷性がやはり寓意的に描かれる『シャーディック』(七四)、実験室から逃げ出した犬の物語『疫病犬と呼ばれて』(七七)などにもこいつた手法が一貫して使われている。ほかに民話を集めた『鉄のオオカミ』(八〇)などがあるが、アダムス

自身が大人と子どもの読者を区別しないと言明しているように、作品の読者層は子どもだけでなく大人にまで広がっている。

(早川敦子)

新 冬二 あたらしい 一九二九—昭4— 児童文学作家。本名古川和夫。東京本郷で生まれる。東京都立第一商業卒業ののち、東武鉄道株式会社に勤務する。詩や小説を書いていたが、生まれ育った時代と環境への反動として児童文学を選ぶ。作品に『すてきなすてきなキーパー』(一九六八)、『口笛のあいつ』(六九)、『あしたがひっこし』(七四)、『くたばれボスザル』(うさぎ隊)など多数。

(松田司郎)

悪漢小説 あくせかんし picaresque novel

スペインにはじまるもので、魅力ある悪漢を主人公とし、民衆の社会を風刺的に描くことによってそこにある人間像を生き生きと浮かびあがらせ、近代文学への道を開いた。その先駆的な作品は一三世紀末に生まれ、一四世紀半ばに獄死したと思われるスペインの僧フランシスコ・ルイスの『El libro de buen amor よき恋の書』だといわれるが、一般的にはこの種のジャンルの最初は『ラサリーリヨ・デ・トルメスの生涯』(一五五四)とされている。貧しい生まれのラサロ少年が、悪知恵にたけた盲人、けちな乞食坊主、無一文のくせに気位の高い従士などの主人に仕えた自分の苦しい体験を語るという形式で、カルロス五世治下の惨めな庶民生活をき

わめてシニカルに描いたこの作品は、やがてスペインだけでなく、フランス、イギリスなどにも及んで、いわゆる悪漢小説というジャンルを生んだ。『ラサリー・デ・トルメスの生涯』はスペインで子ども向きに再話されたものが出版されているだけでなく、英語圏でも子ども向きのピカレスク(children's picture)も生まれてきただ。

(安藤美紀夫)

エーティゾー・エドワード Edward Ardizzone
一九〇〇～七九 イギリスの絵本作家、挿絵画家、画家。ベトナムのハイフォンで、フランス国籍イタリア人が父、スコットランド系イギリス人が母で生まれる。五歳からイギリスに来て、ロンドンの美術学校の夜学で絵を学ぶ。我が子に語った話から絵本『チムとゆうかんなせんちょうさん』(一九三六)が生まれ代表作『チム・シリーズ』がはじまる。第七作『チムひとりばつち』でケイト・グリーナウェー賞受賞。挿絵ではデ・ラ・メアの『Peacock Pie 孔雀のパイ』(四六)をはじめ、ファーリジョンやディケンズやアンデルセンの諸作など一八〇点近い仕事を残す。第二次世界大戦でイギリス政府派遣の従軍画家となり多数の戦場記録を生む。外國各地を旅することに絵日記を記した。生涯庶民の生活を共感を込めて描き、その人柄を忍ばせるまろやかな人物像が特徴で、人物の全体像で情感を描くの得意とした。

(吉田新二)

アーティマ・チュエル Tjeerd Adema 一八八五～?

オランダの児童文学作家。中学を卒業後、薬局で働き、のち地元新聞社見習いを経て、「ホイセ」「アルクマール」新聞の編集や翻訳の仕事をしていた。その間、ある出版社からドミニク作の少年向け冒險物語の翻訳と書き直しの依頼を受け、二〇年前の古い内容を現代化したのが『Van Krantenjongen tot miljonair 新聞売り少年から百万長者へ』(一九一七)となつて発売された。作者はこれを機会に自ら創作することを決意、『De koning der mensredders 人助けの王様』(一七)、『De Verstagger van de Nieuwsbode 使者の報告』(一一〇)、『Vrienden in den Nood 困ったときの友だち』(四〇)、『De jongens van Zeedorp 漁村の少年たち』(四八)などを次々に発表した。第二次世界大戦後、『歯をくいしばつて』(六一)という作品を発表したが、これは大戦中ドイツ軍に占領されたオランダで、占領軍に対するオランダ人の抵抗運動を助ける少年少女の活躍を描いた物語。この作品は日本語版が出ている。

(熊倉美康)

アトウエル メイベル・L Mabel Luce Attwell
一八七九～一九六四 イギリスの挿絵画家。美術学校を中退後、動物、子ども、妖精の絵を数多く発表した。挿絵の仕事としては、『ふしぎの国のアリス』(一九一〇)や、『ピーター・パンとウェンディ』(一一)などが知

られている。アトウェルの描く、大きな瞳、手足の短い丸々した子どもたちは、陶磁器や玩具にも登場し、時代を超えて人気がある。

(田中瑞枝)

アトウォーター リチャード Richard Atwater 一八九一～一九三八 アメリカの作家。シカゴ大学でギリシア語を学び、のち同大学で教える。児童文学作家有名。生涯に二冊の子どもの本『Dris and the Trolls』(ドリスとトロール) (一九三二)、『ポッパーさんのベンギン』(三八)を著したが、後者は途中病に倒れ、夫人の手で完成された。そこには良き市民、良き家庭像が素朴で魅力的な生き生きした会話でつづられ、動物と人のほほえましい関係は広く子どもの心を捉えた。

(島式子)

アトリー アリソン Alison Uttley 一八八四～一九七六 イギリスの児童文学作家。ダービーシャーのクロムフォードに生まれる。マン彻エスター大学で物理学を修め、ケンブリッジ大学の教員養成コースを経て、ロンドンの女子校で教師となる。一九二〇年代から雑誌などに作品を発表していたが、M・テンペストの愛らしい挿絵入りで出版された『りすと野うさぎと灰色の小うさぎ』(一九二九)で評判になる。以来、約六〇年にわたる文筆生活に八〇編を超える子ども向けの作品と田園生活の魅力をつづった二〇編の大人口向の作品

がある。「グレー・ラビット」シリーズのほかにも、『サム・ピッグ』『チム・ラビット』、『こぎつねルーフアス』などを主人公にした一連の動物ファンタジーの作品がある。時間を扱ったファンタジー『時の旅人』(三九)、幼い日の自分を主人公にした『The Country Child』田舎の子ども』(三二)も独特の雰囲気をもつた作品として愛読者が多い。

阿南哲朗 (あなん てつろう) 一九〇三～七九(明36～昭54) 口演童話家、詩人。大分県生まれ。北九州市到津遊園園長。若くして小倉に『三萩野詩社』を興し、詩誌『搖藍』を発行。火野葦平・劉寒吉らの作品を発表する。園長時代、夏季学校を開設、久留島武彦を招いて口演童話を盛んにし、児童文化運動の功労者となる。一九三一年、処女詩集『石に響く』を出版。晩年の詩集に『寄せてかえして』(一九七九)、童話集『よるの動物園』一～四集(六九～八〇)などがある。第一回フクニチ児童文化賞、第五回久留島武彦文化賞を受賞。九州童話連盟会長も務めた。

アニミズム animism 語源はラテン語の anima (魂・呼吸・生命)。万物に靈が宿り、それを崇拜する古代信仰に由来するが、一般的には生命のない事物に、あたかも人間と同じような生命や意志があるかのようを感じることで、文学におけるすべての擬人化された物語の成立要件となっている。コッロー・ディの玩具物

語『ピノッキオの冒險』(一八八二)、グレーラムの動物ファンタジー『たのしい川べ』(一九〇八)などの登場人物たちには、人間と同じような感情、心理の移入がある。とくに絵本類に多くみられるのは、対象となる幼児に心理的特徴としてアニメズム性が残り、呼応しているからである。

(原 昌)

『セロ弾きのゴーシュ』(八〇)の高畠勲、『風の谷のナウシカ』(八四)の宮崎駿らが注目されており、子どものものから青年・大人の文化として一般化しつつある。なお児童文学は『北極のムーシカミーシカ』『龍の子太郎』『ゆき』などがアニメ化されている。

【参考文献】山口且訓・渡辺泰・プラネット編『日本アニメーション史』(一九七七 有文社)、石子順『アニメ傑作コレクション』(一九八一 合同出版)

(石子 順)

アフアナーシュフ アレクサンドル・Н. Александров

(ニコラエフ)

ニードルズそのものに刻みつけるものなどがある。一九一八年に『ミツキー・マウス』で成功したディズニーは、グリム童話の『白雪姫』を三七年に最初の長編色彩アニメーション映画にしあげた。以来フィルム・アニメーションは世界各地に波及する。日本最初の動画は一七年北山清太郎『サルとカニの合戦』で、大藤信郎の折り紙アニメーションもあつたが、長編は『桃太郎の海鷺』(一九四三)、『桃太郎海の神兵』(四五)など海軍省後援によって定着した。戦後は東映動画が『白蛇伝』(五八)で長編動画制作を開始した。『太陽の王子ホルスの大冒險』(六八)、手塚治虫の『ある街角の物語』(六二)などもあつて隆盛をもたらした。テレビアニメーションも六三年に虫プロの『鉄腕アトム』によつて放映を開始した。現在アニメーション作家では

学史家、民族学者、口承文学研究家。欧露のヴォロネジ県に生まれる。モスクワ大学法学部卒業。初期神話学派の代表者で、『*Поэтические воззрения славян на природу*』スラブ人の詩的自然觀』三巻(一八六六~六九)を著す。最大の業績としては、ロシアの民話の全体像をはじめて明らかにした『ロシア民話集』全八分冊(五五~六四)がある。自ら採集した、またV·I·ダーリ、P·I·ヤクーシキンといった言語学者、民俗学者がロシアの各地から集めた六〇〇編あまりの民話の原典として、今も貴重な存在となつてゐる。児童書としても、長年にわたつて、ラチョフ、マーウリナなど優れた画家の挿絵になる絵本をはじめ、多く出版さ

れてきた。日本でも、一九二〇年代に『アファナーシエフ童話集』第一部、第二部が出版されて、以来、近年の『金の魚』『イワン王子とはいひおかみ』『かえるの王女』(ともに一九八五)に至るまで少なくない。『ロシア民間伝説集』(一八五九)も完成させた。しかし、当時の帝政ロシア政府が行っていた検閲にひつかかり、一九一四年まで出版を許されなかつたのである。

阿武天風

一八八一~歿年不詳(明15~?) 編

集者、作家。本名信一。山口県阿武郡三見村の生まれ。はじめ軍人を志したがのち博文館に入社、押川春浪の後を受けて「冒險世界」の編集発行人、のち主筆となり、「妖魔王国」「極南の迷宮」などの冒險小説を書いた。春浪に「硬骨気節の士」と評されたが、アメリカの排日移民法案に怒り日米未来戦争を素材に『太陽は勝てり』を「少年俱楽部」に連載した(一九二六年二七)。著書に『海上怒濤譚』(一二二)などがある。(浜野卓也)

(北畠静子)

く語るために美しいことばによって表現しなければならないというのが持論であつた。著書に『童話の正しい話し方』(五六)がある。(川上春男)

安倍季雄

一八八〇~一九六二(明13~昭37) 口演童話家。山形県鶴岡市に生まれる。函館中学卒業(一九〇三)後早稲田大学に入学するつもりで上京。アルバイトとして早稲田大学出版部の「中等教育」の編集助手となり、ついで慶應義塾の「三田評論」に関係した

のが縁となり、一九一〇年時事新報に入社、雑誌「少年」「少女」の主幹として編集に当たる。大正のはじめ、久留島武彦の実演に共鳴し、武彦の要請で壇上に立つようになり、読ませる童話より聞かせる童話に移る。二五年ラジオ放送が開始されるや、しばしばマイクの前に立つ。初放送(一五・七)がお伽噺『總理大臣の涙』。二九年時事新報社を退社後、東京中央放送局(JOA K)の「コドモノテキスト」の編集顧問。のち大阪毎日新聞社の小学生新聞の顧問となり、武彦とともに「全国童話協会」を創立、全国を巡講、口演童話家として名声を得る。主著『子宝文庫』全一〇巻(二二八)のほかに『愛のふるさと』(二二)などがある。(川上春男)

阿部悟堂

一九〇一~六六(明34~昭41) 口演童話家。本名順義。

東京世田谷区に生まれ、一九二五年慶應大学経済学部卒業後、交詢社に勤務、学校時代から口演童話をはじめたが、応召し、除隊後(一九四八)日本童話協会会員となり、口演童話の実践と研究に専念。日本童話会ができると会員となり、五七年口演部を独立させて東京童話会初代会長となる。童話を美し

く語るために美しいことばによって表現しなければならないというのが持論であつた。著書に『童話の正しい話し方』(五六)がある。(川上春男)

判精神の旺盛な作家として戦後には『人工庭園』(五四)、『捕囚』(七一)などを発表。文学評論・英米文学研究の仕事も多く、メルヴィル『白鯨』は名訳とされる。児童文学においては、長編少年小説『新聞小僧』(四七)その他があり、またスタイル・ヴァンスンの『宝島』、キングズリー『水の子』などの翻訳も定評がある。

(前川眞代)

発行し仙台に郷土童謡運動を起こす。著書『こけし這子の話』(一九二八)は、こけしに関する最初の研究書といわれる。戦後、仙台児童クラブの復活、晩翠児童賞の創設、「おてんとさん」会結成などに努める。

(遠藤実)

アボット・ジェイコブ Jacob Abbott 一八〇三~七九 アメリカの児童文学作家、宗教家、教育者。初期の『Rollo Books ロロ・ブックス』(一八三五年ごろより刊行)一四冊は、ニューイングランド少年の戸外生活を描いた教訓物語であったが、主人公ロロはアメリカでのリアリスティックな少年像の最初だと考えられる。彼の作品は二〇〇冊にも及ぶが、代表作『The Franklin Stories フランコニア物語シリーズ』一〇巻(一八五〇~五三)には、人物たちに子どもの本性がのぞかれ、田園生活のありのままの描写とともに、リアリズム小説を深化させた。

(原昌)

天沢退二郎 一九二六~(昭11~) 詩人、仏学者、児童文学作家。東京生まれ。東京大学仏文科卒。中世フランス韻文物語を専攻、明治学院大教授。詩集『時間錯誤』(一九六六)、『血と野菜』(七〇)を出して詩作活動を続ける一方、入沢康夫らと宮澤賢治遺稿調査に取り組み、文献批判学の方法により『校本宮澤賢治全集』全一四巻(七三~七七)を編纂、賢治研究の水準を飛躍的に高めるために貢献した。『宮澤賢治の彼方へ』(六八)、『宮澤賢治論』(七六)、『宮澤賢治』(鑑)〔八六〕と一〇年ごとに賢治論をまとめた評論集を行。長編『光車よ、まわれ!』(七三)で本格ファンタジーを開拓、短編集『闇の中のオレンジ』(七六)を経て三部作『オレンジ党と黒い釜』(七七)、『魔の沼』(八一)、『オレンジ党 海へ』(八三)を発表。作中世界に一つの悪意が瀰漫することによりファンタジーが成立するとし、自宅近くの千葉の風景をモデルに「黒いもの」をめぐる三つの魔法が織り成すドラマを描く。H・ボスコの『バスカレ少年の物語』の翻訳がある。

(新倉朗子)

アマノキシヒ

天江富弥 一八九九~一九八四(明32~昭59) 児童文化活動家。郷土童謡玩具研究家。本名の富蔵にちなんで登美草の名を用いたこともある。仙台市に生まれる。一九二〇年明治大学専門部商業科卒業。中学時代から竹久夢二に心酔、自らも童謡、童画、童具をつくる。二一年錫木碧(スズキヘキ)と「おてんとさん」を

天野雉彦 一八八九~一九四五(明22~昭20)

口演童話家。本名隆亮。^{たかすけ}島根県津和野に生まれる。甥が徳川夢声。一九〇〇年島根師範卒業、島根県益田町訓導、翌年師範附属訓導。巖谷小波のお伽口演に興味をもち〇五年上京、久留島武彦のお伽俱樂部に参加、^{*}坪内逍遙の指導を受ける。同時に武彦の回字会、岸辺福雄の喃々会にも関係し童話と講談の中間をいく、独自の話風を開発する。四五年東京空襲下防火活動中生涯を終えた。

(川上春男)

天邪鬼 ^(じやく)いたずらで人のいうことに何でも逆らう妖怪。あるいは何にでも反対する者を指す場合もある。昔話の中では『瓜子姫』に登場し、瓜子姫を誘い出して食べてしまったり、縛りあげて、瓜子姫に化けてじじ、ばばをだます、毛むくじやらのいたずらものとされている。最後に仕返しされ、糞・そばの根の赤いのは天邪鬼の血で染まつたといわれる。長崎の毫岐では、穀物のみな、あまんじやくめがしごいたので、先の方しか実らなくなつたとか、また、天から雑草の種をまくので地上に雑草が絶えることがないなどと伝えられている。地方によつては、あまんぎやぐ、天のさぐめなどと呼ばれており、山姥と同一視されるところもある。

(福原登美子)

あまんきみこ 一九三二—(昭6—) 童話作家。

本名阿萬紀美子。旧満州国の撫順市に生まれ、新京・大連に移り住み、大連の神明女学校二年にて敗戦を迎

える。言語に尽くせぬ重い心的体験を抱えて帰国、大阪府立桜塚高校を卒業すると同時に結婚し、二児の母となる。数年して勉学の意欲に駆られ、日本女子大学児童学科の通信教育部に入学、その縁で児童文学作家與田準一を知り、また日本児童文学者協会主催の講座「童話教室」(第一期)を受講。與田の勧めで「びわの実学校」に『くま紳士』を投稿。一九六五年一〇月、一号に掲載される。以後、人間性にあふれる童話を書き続ける。「びわの実学校」同人。六八年三月、「びわの実学校」発表作品を中心に処女童話集『車のいろは空のいろ』を出版。同年四月、日本児童文学者協会第一回新人賞受賞。一月、第六回野間児童文芸賞の推奨作品となる。八二年三月には、『続車のいろは空のいろ』を出版。そのほかの主な仕事に、絵本『おにたのぼうし』(一九七〇)、『どうしきぶつぶ』(七一)、『ふうたのゆきまつり』(七一)、『きつねみちは天のみち』(七二)、『ふうたのはなまつり』(七六)。八〇年一一月出版の『こがねの舟』で旺文社児童文学賞受賞。(畠山兆子)

アームストロング ウィリアム・H. William H. Armstrong 一九一四—アメリカの児童文学作家。長く高校の歴史教師をしながら作品を発表。代表作に南北戦争から一九〇〇年までを舞台に南部の一黒人家族の苦闘の生活を、愛犬サウンダーを中心にして描いた、『Sounder』サウンダー(一九六九)がある。この作品

はニューベリー賞を受ける。ほかに、『Sour Land 不毛の地』(七一)や『The Mills of God 神様の水車小屋』(七二)、『Joanna's Miracle ジョアンナの奇跡』(七七)などがある。

アームストロング リチャード Richard Armstrong 一九〇三 イギリスの児童文学作家。一〇〇年にはわたる海軍生活の体験をもとに、青少年を対象にした海洋小説を執筆。カーネギー賞を受賞した『海上育つ』(一九四八)をはじめ、『危険な岩』(五五)、『燃えるタンカー』(五八)など、職業小説ともいえる設定の中でも、さまざまな試練や経験、あるいは冒險を通して精神的に成長していく少年たちの姿が生き生きと描き出されている。

(早川敦子)

雨の日文庫 あめのひ 教室での子どもたちの自由読書に資するため、一作を薄冊の一冊に作り、二五冊を一函に詰めて一集とした読み物の叢書。麦書房より一九五八年七月より翌年にかけ、全六集を刊行。編者は阿部知二、石井桃子、宮原誠一、八杉龍一、国分一太郎。内外の新旧児童文学、民話、科学読み物、児童の作文と詩などあらゆる分野を網羅し、新進の児童文学者や科学者をも執筆陣に登用した挿画入り、A5判、短編のアンソロジー。読書教育の高まりと新しい児童文学への潮流の間に生まれた。対象を低学年においている。なお、六六年に『雨の日文庫 新編』一〇冊が出版さ

(藤森かよこ)

はニューベリー賞を受ける。ほかに、『Sour Land 不毛の地』(七一)や『The Mills of God 神様の水車小屋』(七二)、『Joanna's Miracle ジョアンナの奇跡』(七七)などがある。

アームストロング リチャード Richard Armstrong 一九〇三 イギリスの児童文学作家。一〇〇年にはわたる海軍生活の体験をもとに、青少年を対象にした海洋小説を執筆。カーネギー賞を受賞した『海上育つ』(一九四八)をはじめ、『危険な岩』(五五)、『燃えるタンカー』(五八)など、職業小説ともいえる設定の中でも、さまざまな試練や経験、あるいは冒險を通して精神的に成長していく少年たちの姿が生き生きと描き出されている。

(早川敦子)

雨の日文庫 あめのひ 教室での子どもたちの自由読書に資するため、一作を薄冊の一冊に作り、二五冊を一函に詰めて一集とした読み物の叢書。麦書房より一九五八年七月より翌年にかけ、全六集を刊行。編者は阿部知二、石井桃子、宮原誠一、八杉龍一、国分一太郎。内外の新旧児童文学、民話、科学読み物、児童の作文と詩などあらゆる分野を網羅し、新進の児童文学者や科学者をも執筆陣に登用した挿画入り、A5判、短編のアンソロジー。読書教育の高まりと新しい児童文学への潮流の間に生まれた。対象を低学年においている。なお、六六年に『雨の日文庫 新編』一〇冊が出版さ

れた。

新井紀一

一八九〇～一九六六(明32～昭41)

(斎藤寿始子)

東京四谷第一尋常小学校卒。水守龜之助の紹介で小川未明、藤井真澄らを知り、雑誌「黒煙」に参加。同誌に処女作『暗い顔』(一九一九)を発表。児童文学作品は、昭和になって「金の星」「日本少年」「少年世界」「少女の友」などに執筆。著書に、『鶴小屋の番兵』(四一)、『父いづこ』(四三)、『秀美の慰問袋』(四三)、『菊地一族』(四三)などがある。

(五十嵐康夫)

新井弘城 一八九四～一九八六(明27～昭61)

編集者、児童文学作家、児童文学研究家。本名南部新一。舞鶴市岡田の生まれ。京都の立命館中学に入学。

(五十嵐康夫)

四年の時に病のため中途退学する。その後、博文館から発行していた「幼年世界」「少年世界」に投稿し、当時の編集主幹嚴谷小波に認められ、一九一五年博文館の助手として「幼年画報」「幼年世界」の雑誌編集に従事する。その後二〇〇年(大9)、舌耕芸としての講談の伝統に立った「譚海」創刊と同時に編集主任を務めた。

(五十嵐康夫)

このころから自ら少女読み物を執筆「少女画報」に『幸運な星』、『少女世界』に『折れた薔薇』を発表する。

(五十嵐康夫)

二八年夏、博文館を退社。戦後は、ポプラ社の顧問となり、また児童文学の世界に情熱を注ぎ、資料収集、雑誌研究に没頭していた。著書に『回想の博文館』(一

九七三)がある。

新井光子
みづこい

(伊藤元雄)

民話を基盤としたものなどがあるが、いずれも古くから伝承されたもので、古くは八世紀ごろ成立したものもあるという。この驚くべき中東の物語群が広く全世界に知られるようになったのは、サー・リチャード・バートン(一八二二~一九〇〇)の一六巻に及ぶアラビア語からの英訳(一八八五~八八)による。三〇カ国語を自由に使いこなしたという彼は、晩年をこの翻訳にささげ、それによって「サー」の称号を受けられた。

(三宅忠明)

アラビアン・ナイト Arabian Nights アラビア文化圏の伝承的説話文学。『千夜一夜物語』の俗称。妻の不貞を発見したインドの王が女に対する復しゆうのため、夜ごとに処女をめとり翌朝死刑に処していたが、ついに死刑執行人の娘以外に処女がいなくなつた。しかし、彼女が王にとても面白い話をし、中途でやめたので処刑を免れる。このようにしていつしか千一夜が過ぎ、その間に三人の子をもうけた娘はついに許されるという構成である。『アラジンと魔法のランプ』『アリババと四〇人の盗賊たち』『船乗りシンドバッド』などのように、世界中の子どもたちに親しまれた話のほかに、史実をもとにした伝説、神話の変形したもの、説を知る。これがのちに書かれる『タランと角の王』

有賀連 れん 生歿年不詳。童謡詩人。東京生まれ。「赤い鳥」への投稿から詩作をはじめ、入選二編。北原白秋に認められて赤い鳥童謡会に入会、「乳樹」「チクタク」の同人でもあつた。一九三三年、童謡集『風と林檎』を出版。翌年童謡誌「JAPON」を創刊し、独力で六号まで発行した。発想や素材のユニークな童謡を書いて囁き、書いたが、「JAPON」廃刊後は筆を断つてしまつた。代表作は『夜店』『大きなお風呂』など。

(畠中圭二)
アリグザンダー ロイド Lloyd Alexander 一九二

四一 アメリカの児童文学作家。ペンシルベニア州フィラデルフィア生まれ。幼いころから、ギリシアやケルトの神話に興味をもつていた。大学を中退して、軍隊の下士官としてウェールズへいき、ウェールズ伝説を知る。これがのちに書かれる『タランと角の王』

(一九六四)をはじめとするプリディン物語五部作の

きつかけとなつた。フランス人の妻を伴つてアメリカへ帰つたアリグザンダーは、漫画家、編集助手などの仕事をしつつ、大人向けの作品を書いていたが、ウエルズ伝説を下敷きにした『ブリティン物語』で、一挙にアメリカを代表するファンタジー作家となつた。善と悪との戦いの中で、成長していくタラン少年の姿は、いつの時代においても、人間の自己探究はやむことがないと教えてくれる。このほか、中世を舞台にしたユーモア物語『人間にたりたがつた猫』(七三)などが書かれている。

有島生馬

ありしま
一八八二—一九七四(明15—昭49)

小説家、画家、児童文学作家。本名王生馬。^{*}父武の次男として横浜の税関官舎に生まれる。有島武郎の実弟。里見弾の兄。学習院初等科・中等科を経て東京外語イタリア語科卒。中等科のころから島崎藤村に傾倒、詩集を耽読し、小諸にまで訪ねている。イタリア、フランスにて絵画、彫刻を学び、二科会を創設して画家となり、かたわら「白樺」同人として小説も発表。創作集『蝙蝠の如く』(一九一三)、『南欧の日』(一六)などがある。児童文学における仕事には「赤い鳥」に『泣いて褒められた話』『大将の子と巡査の子』『ばあやの話』『爺やの話』など七編の童話を執筆している。全集は『有島生馬全集』全三巻(三三一—三三三)が刊行されてい

る。

有島武郎

ありしま

一八七八—一九三三(明11—大12)

(原岡秀人)

小説家。旧薩摩藩士で明治政府に仕える高級官吏の長男として東京に生まれた。弟に画家で作家の有島生馬、作家の里見弾がいる。幼時、父親の横浜税関長時代、ミッショニン系の横浜英和学校で西欧風教育を受け、学習院中等科から札幌農学校に進み新渡戸稲造、内村鑑三に師事してキリスト教信者となる。卒業後渡米してハーバード大学院に学ぶ。一九一〇年、武者小路実篤、志賀直哉らの創刊した『白樺』に参加して『かんかん虫』その他を、さらに『或る女のグリンプス』(のちに『或る女』と改題刊行)を連載した。続いて『カインの末裔』『生れ出づる悩み』などを発表して大正期の代表作家となつた。きわめてヒューマンな性格と欧米の社会思想を身につけた武郎は、作家である一方、社会思想家として位置づけられたが、やがて良心の命するまことに社会主義的志向から北海道にあつた有島農場を小作人に解放するなど、思想の実践に苦慮した。妻に死別(一九一六)されてからは独身で三児を育てたが、長男の誕生から妻の死までを述べる『小さき者へ』(三二)には、親子とは、社会とは、自我とはなどの諸問題に対する有島の認識が述べられているが、あまりにも人間的であり過ぎたため、人妻波多野秋子との恋に行き詰まつて情死した。児童文学作品としては翻訳『真夏の

夢』『燕と王子』にはじまり、『一房の葡萄』(一〇)、『溺れかけた兄妹』『碁石を飲んだ八つあん』(以上二二)、『僕の帽子のお話』『片輪者』『火事とボチ』(以上二三)など六編の短編童話を雑誌『赤い鳥』その他に発表、これらをまとめ『一房の葡萄』(一一)として刊行した。これらの童話に共通しているのは、人生の否定的場面(盗み・卑怯など)を設定し、人間の弱さを直視するところから出発し、いかに生きるべきかを子どもの目の高さで体験告白的に叙述している点である。

【参考文献】 浜野卓也『童話にみる近代作家の原点』(一九八四 桜樹社)

有本芳水

ほりもとい
一八八六—一九七六(明19—昭51)

詩人、歌人。本名歎之助。兵庫県飾磨郡飾磨町に生まれる。早稲田大学高師部国漢科卒業。一九〇九年、実業之日本社に入社。とくに「日本少年」の主筆として活躍。三〇年在社の後、岡山に移住。戦後、当地の短大や大学に出講。少年期より「文庫」に短歌を投稿し、「車前草社」に入り作歌に励む。また詩草社の「詩人」に詩作を発表した。芳水の名を高らしめたものは、明治末期から大正期にかけて「日本少年」に毎号発表した少年詩であった。その作品は実業之日本社刊の『芳水詩集』(一九一四)、『旅人』(一七)、『ふるあと』(一八)、『悲しき笛』(一九)、『海の国』(二二)に收められ広く流布した。わかりやすいことばの七五調で、人生の哀

歎を感傷的にうたいあげており、当時の少年たちに深い共感を呼び起した。後の二者には詩とともに短歌なども収録されている。なお、芳水は大衆的な少年少女小説においても活躍し、「日本少年」に連載したのち出版した長編冒險小説『赤い地図』(一三)、『怪軍艦』(一五)、『馬賊の子』(一六)などの作品があり晩年の回想記『笛鳴り止まず』(七一)は、資料として貴重。(弥吉音二)

アルゲージ トウドル Tudor Arghezi 一八九〇—一九六七 ルーマニアの詩人。首都ブクレシュティ

の出身で、早くから孤児となり、苦学して中等教育を終える。一六歳で詩人として認められ、一時修道院に入り、のちにスイス、フランスを放浪した。帰国後、ルーマニア詩の最高峰とみなされる抒情詩・思想詩を発表した。子どもの純粋な目に映じた小動物の姿を描いた『Prisaca ハチの巣箱』(一九五四)その他の児童詩によつても多くの読者を得た。(直野 敦)

アルジツリ マルチエッロ Marcello Argilli 一九

二六) イタリアの児童文学作家、編集者。児童新聞「ピオニエーレ」の編集にたずさわりながら、『くじらをすきになつた潜水艦』(一九六八など、人間と機械にかかる諷刺的な作品を発表している。ロボットを中心とした冒險』(五五)や、核兵器の問題をとりあげた『A-

エトの青少年のアイドル作家となつた。一九七〇年
レーニン・コムソモール賞、七四年ロシア共和国国家
賞、七八年レーニン国家賞を受ける。日本でも中・短
編集『青春への誘い』(七五)、『人生のとびら』(七九)
が翻訳出版されている。青少年に大人になることの意味、
つらさや喜びを真剣に、時にユーモラスにほほえましく語りかけているのがこの作家の特徴である。

(北畠静子)

アレゴリー allegory 語源はギリシア語 *allegoria* へ *allegorein* (比喩的に話す)。比喩 **寓話*、*寓意物語*のこと。文学上では人間、動植物などの具体的な事物を借りて、ある抽象的概念を示そうとする表現上の手法のことをいうが、同時にその結果生まれた物語をも指す。バニヤン『天路歴程』(一六七八)、マクドナルド『北風のうしろの国』(一八七一)は宗教的アレゴリー。『イソップ物語』(紀元前、六世紀頃)、ラ・フォンテーヌの『寓話詩』(一六六九)など、短いたとえ話類をとくにフェーブル(寓話)ともいう。
(原 昌)

アレン エリック Eric Allen (一九六八) イギリスの作家、ジャーナリスト。ロンドンに生まれ、一九三〇年ジャーナリストとしてスタート。若い時から旅を好み、第二次大戦後もキプロス、レバノン、カナリア諸島など各地を回った。子どもの本は大戦中に書き出したが、晩年ロンドンに落ちついての第一作『か

ぎつ子たちの公園』(一九六三)はさわやかな共感をもつて子どもたちの現実を内と外の両面からよく捉え、その年のカーネギー賞次点に選ばれた。(清水真砂子)

安房直子

(なほこ) 一九四三(昭18) 童話作家。

本名峰岸直子。東京に生まれ、日本女子大学附属高校を経て、一九六五年、日本女子大学国文科を卒業。大學在学中より山室静に師事し、雑誌「目白児童文学」創刊号(一九六二)に『月夜のオルガン』を発表して以

来、童話創作の道を歩みはじめる。以後、毎号同誌上で作品を発表する。大学卒業後、日本女子大学の卒業生を中心に発足した、同人誌「海賊」に同人として参加し編集に携わるとともに、作品を発表する。同誌は「目白児童文学」とともに童話作家安房直子誕生の母体となる。「海賊」に発表した『さんしょっ子』(六九)が、日本児童文学者協会新人賞を受賞(七〇)。これが童話作家としてのデビューとなる。七二年、『北風のわすれたハンカチ』がサンケイ児童出版文化賞推薦図書となり、七三年には、短編集『風と木の歌』で、小学館文学賞受賞。八二年、童話集『遠い野ばらの村』で野間児童文芸賞受賞。八五年、『山の童話 風のローラースケート』で新美南吉児童文学賞受賞。童話創作当初から今日に至るまで、一貫して空想世界を構築し続けており、現実空間と異次元空間を操るその物語構成の巧みさ、丁寧さ、および知性と新鮮な感覚にあふれる落

ちついた文章・文体には定評がある。『アラビアン・ナイト』や『ファンタジー』、宮沢賢治に傾倒し、ややこぢんまりとはしているものの、適度に抑制された独自の童話世界をつくり出している。また、美しく豊かなファンタジーを開拓する表層の底に、深い現実認識を一種形而上学的ともいえる象徴性をもつて描く点にもその特徴がある。受賞作のほかに『あめのひのトランペッタ』(八〇)、『はるかぜのたいこ』(八〇)といった絵本や『まほうをかけられた舌』(七一)、『ハンカチの上の花畠』(七二)、『白いおうむの森』(七三)、『銀のくじやく』(七五)、『ライラック通りのほうし屋』(七五)、『日暮れの海の物語』(七七)、『天の鹿』(七九)など多数の作品がある。

「きつねの窓」^(きつねのまど) 童話。初出は一九七一年「目白児童文学」。安房直子の本領とする、現実世界と非現実世界との微妙な交流をみごとに描き出した作品。現実世界の大手であるへばくが、狐と話のできる非現実世界へ入っていき、狐に指をききよ色に染めてもらう。その指でひし形容をつくると好きなものが見えるといった不思議な体験をした後、また現実世界へ戻ってくる。長い間の習慣でつい指を洗つてしまい、すべての不思議が消え去ってしまうという話。宮沢賢治の影響をのぞかせる作品としても興味深い。(石井光恵)

○六一六六 イタリアの児童文学作家、ジャーナリスト。「コソリエーレ・ディ・ピッコリ」ほかいくつかの児童新聞の編集に携わりながら、主として『Giulietta se ne va』ジュリエッタは去っていく』(一九五八)、『Violetta la timida ひつこみじあんなヴィオレッタ』(六二)など、少女向けの作品を数多く書いた。また『とってもすてきな動物記者』(五九)のように、人間と動物との関係をユーモラスに描いた作品もある。

(安藤美紀夫)
アンテルセン ハンス C Hans Christian Andersen

一八〇五~七五 デンマークの詩人、作家。七年戦争(一八〇七~一四)以来傾く国運の中でその反動として栄えた北欧浪漫主義の黄金期に、詩、小説、紀行、戯曲と幅広い創作活動を行い、とくに当時ドイツマン派を経てデンマークに定着しつつあった文学のジャンル、エーヴェンチア(短編幻想物語に独自の境地を開拓)、今日の童話の源流となるものを生んだ。四月二日、オーデンセの細民の子として生まれ、スラム街の一角の一間だけの家に育つた。父は公式には日雇労働者と登録された徒弟を置けぬ靴職人。無神論に近い合理主義者で果たせなかつた進学の夢に未練があり、夜ごと文学作品を大声で朗読した。文盲の母は父よりも七、八歳ぐらい年上で、生地も生年も不詳の私生児、迷信とキリスト教の混淆する当時の大衆宗教の典型的

信徒だった。母には未婚のうちに妻帯者の陶器職人との間にもうけたアンデルセンよりも五歳年上の私生児の娘があり、母の母が引き取って養育していた。アンデルセンはこの異父姉と暮らしたことはなかつたがその存在は後年に至るまで暗い不安となつて心底にわだかまつた。父方の祖父はアンデルセンが生まれた時は完全な狂人で、異様な風采で市中を徘徊し、悪童に嘲罵されるその光景はアンデルセンをおびえさせた。悲惨な家系を背負う極貧の生い立ちをアンデルセンは「泥沼の中」と呼んで、終生消えぬ根深い劣等感のもとなつた。早くより読書や人形芝居に親しだ彼は幻想の世界に逃避して外界から孤立していた。七年戦争末期の一八二二年、父は将校となるのを夢みて出征、停戦とともに一兵卒のまま帰還、健康を害していく一六年四月、二三歳で夭折した。その一年後に母は再婚、一八歳年下の靴職人のその夫とも四年後に死別、洗濯女や女中をして糊口をしのぎ、三三年一〇月救貧院で死んだ。愛情を込めてアンデルセンはその母の面影を小説『即興詩人』（一八三五）のドミニカ、『ただのヴァイオリンひき』（三七）のマリア、童話『あの女は役たたず』（五一）の洗濯女などに描いている。

一九年四月アンデルセンは堅信礼を受けると、同年九月王立劇場のスターを夢みてコペンハーゲンに出たが、これは悲惨な環境よりの逃避でもあつた。三年間

の俳優修業は失敗に帰したが、その間に喚起した人々の関心が結集して王立劇場重役会を動かし、その推薦により国の奨学金交付が決定、二二年一〇月スレーエルセのラテン語学校第二学年に編入学した。二七年四月最高学年の第四学年を中退するまでの四年は、学校というマスプロ教育の社会で均一化した生活を強いらされた生涯に唯一の体験であり、露呈したアンデルセンのひ弱な神経が校長の激しい性格と対立してへわが生涯の最も暗く苦渋に満ちた時期となつた。中退後個人教授を受け二八年一〇月大学入学資格検定試験に合格、同月コペンハーゲン大学に入学した。翌年一月受験準備中より構想を練つていた処女作の小説『徒步旅行』を自費出版した。荒唐無稽な幻想アラベスクともいうべきこの小説にも、アンデルセン文学の特色である自伝的要素と紀行的要素の混淆がすでにみられる。

同年一一月学士候補資格試験に合格すると学業を離れ作家業に専心することを決意し、一瞬の解放感から翌年五月から八月にかけてフューン、ユトランドに国内旅行、途中立ち寄った学友の家でその姉リーボア・ヴィクトに惹かれた。この恋は一月リーボアの訣別状で幕切れとなつたが、アンデルセンはあくまで相思相愛の恋恋だつたと信じて疑わなかつた。この初恋体験にはその後首尾一貫しているへ根深い劣等感が女性との性交渉を不可能にし、恋愛的色彩を帯びる女性との

熱烈な交友関係にのみ精神的なはげぐちを求める／アンデルセンの恋愛パターンがすでに現れていた。最も熱愛したスウェーデンの女性歌手イエニイ・リンドとの四三年から四七年にかけての交友でも、求婚する積極性に欠けていた。反面恋愛体験からは多くの恋愛詩が生まれ、中にはE・グリーグ作曲の『われ君を愛す』(三二)のように今なお世界的に愛唱されているものもある。

三三年四月より翌年八月にかけて国の旅行用奨学金による海外大旅行を体験、当時北欧の芸術家のメッカであったイタリアにはとくに深い感銘を受けて、その印象からイタリア紀行と自伝をないまぜた出世作の小説『即興詩人』が生まれた。その刊行から一ヶ月後の三五年五月、最初のエーヴェンチア四編が六四ページの小冊子となつて出版された。これは「あたら有為な才能を児戯に類することに費消する」と一部の批評家のひんしゆくを買ひ、アンデルセン自身この分野で不滅の名声を得るとは夢想もしなかつた。三六年に『O.T.』、三七年に『ただのヴァイオリンひき』とへ初期三作の 小説を刊行し終えて文壇に地歩を固めたものの、作家生活に実質的な安定を得たのは、三八年五月、國より四〇〇リーグスダラーの作家年金交付が決定してからだつた。以後は放浪の詩人の名にふさわしく旅に明け暮れ、海外旅行だけでも通算三〇回に及んだ。エー

ヴエンチアこそ自分に最も適した表現形式であることには目覚めたのは、当初七冊の小冊子刊行後の四三年で、それとともに小冊子の表題より「子どものための」を削除、対象は成人にも及ぶ文学の一形式であることをうたつて「新エーヴェンチア」と改題した。エーヴェンチア作家としての声価が定まるとともに国内外より贈られる栄誉が漸増し、六七年一二月には故郷オーデンセの名誉市民に推戴され、全市をあげてその祝祭が盛大に行われた。幸福感の絶頂にあつて彼は激しい歯痛にさいなまれ、喜びと不安・苦痛が常に同居していた彼の生涯がこの一瞬に凝縮されて象徴された。根深い劣等感ゆえに孤独に落ち閉鎖的となる反面、他の追随を許さぬほど国内外に多くの知友をもつたが彼は常に二律背反する矛盾が同居する複雑な性格だった。七五年八月四日、晩年親交の厚かつたユダヤ人の卸商メルキオーラ家のコペンハーゲン市外の別荘ローリングヒードで永眠、同市内のアシステンス墓地に埋葬された。

「しつかりものの錫の兵隊」<sup>しつかりものの
hafte Tinsoldat</sup> 童話。社会のアウトサイダーであつたアンデルセンを象徴するような一本足の錫の兵隊の物語には、アンデルセン童話の特色のいくつかが示されている。その一つは「重視点」である。誕生日の贈り物として錫の兵隊が登場する冒頭の場景は現

実の世界の視点から描かれている。それがいつか一本足の錫の兵隊の視点、つまり幻想世界の視点に変わり、この二つの視点が連立して物語は進む。この二重視点の巧みな操作によって擬人法の活性、ユーモア、風刺、暗喩などを生み出している。またアンデルセンのメルヘン地図はデンマークの民間信仰の世界と一致し、現実の世界を幻想空間が取り巻いているが、彼は無生物を活性化することにより、現実の世界のただ中にも幻想空間を生み出した。この物語はその一例である。活性化した無生物の世界はまた原始のアニミズムの世界、つまり幼児の世界である。

「雪の女王」 *Sneedronning* 童話。雪の女王にさらわれたカイを求めてたどるゲルダの旅路を大枠とするこの物語には、個々に独立した七つの物語が含まれている。アンデルセンは叙事詩的構造に立脚するためには、個々に独立した七つの物語が

こうした「集合物語」形式を適用することによって描写領域を拡大した。「幸運のオーバーシューズ」(一八三八)、「眠りの精のオーヴェルゲイエ」(四一)、また小説『絵のない絵本』(四四)などいずれもその例である。またこの物語にはアンデルセンのエーヴェンチアは、迷信とキリスト教とが混淆していた一九世紀デンマークの大衆宗教の世界を土壤としていることが示されている。

多くの迷信的存在が生きている大衆宗教の中でも、最後

により頼む絶対的権力者は神でありキリストである。その図式が主の祈りによつて雪の軍勢を抹殺するゲルダに示されている。

【参考文献】 鈴木徹郎『ハンス・クリスチャン・アンデルセンの虚像と実像』(一九七九 東京書籍)、エリアス・ブレズド『アンデルセン生涯と作品』(高橋洋一訳、一九八二 小学館)

安東次男

一九一九—(大8-) 詩人、批評家、翻訳家。岡山県に生まれ、第三高等学校でフランス語を学ぶ。東京大学経済科卒。詩集『蘭』(一九五二)、『死者の書』(五五)を出し、詩人として活動する一方、批評の分野では『芭蕉七部集評釈』(七三)が高く評価された。アラゴン、エリュアール、サガンなど現代フランス文学の訳業と並び、ドリュオン『みどりのゆび』(五七)をはじめ、ギヨ『密林の使者』(六七)、ボーデュイ『風の王子たち』(五六)、アヴリーヌ『黒ちゃん白ちゃん』(三七)など児童文学の翻訳も多い。

(新倉朗子)

安藤美紀夫

一九三〇—(昭5-) 児童文學作家、研究者、翻訳家。本名一郎。京都市生まれ。

父真澄は、百田宗治の「椎の木」同人だった詩人。旧制京都三中卒業後、貸本屋、小学校の産休代替教員を経験。のち、新制高校に編入学、京都大学イタリア文学科に進む。大学在学中、『夏子のスケッチブック』が

「毎日中学生新聞」児童小説コンクールに入選。卒業後、北海道へ。網走郡津別町、北見市で、高校教員を務める。かたわら、一人で、ガリ版刷りの『現代イタリア児童文学研究資料』を刊行。はじめての翻訳は、

ファビアーニ作『黒い手と金の心』(一九五七 杉浦明平と共訳)。一九六二年の『白いりす』以降、創作活動も行う。『白いりす』は、生まれつき白毛のため、仲間はずれになるエゾリスのユックの一生を描き、優れた物語性をもつ。主人公が殺されるという結末も、注目を集めた。ほかに、アイヌのユーカラに取材した『ボイヤウンベ物語』(六六)、『ブチコット村へいく』(六九)、『でんでんむしの競馬』(七二)、『おかあさん だいつきらい』(七八)、『おばあちゃんの大ジョータン』(八二)、今日の中学生が抱えている問題を書いた『風の十字路』(八二)など多数。翻訳に、カルヴィーノ『マルコ・アーレドさんの四季』(六八)、コッローデイ『ピノッキオのぼうけん』(七〇)など。研究の著作として『世界児童文学ノート』I~III(七五~七七)、「児童文化」(七七)、「児童文学の散歩道」(七七)などがある。日本女子大学児童学科教授。

「でんでんむしの競馬」(一九七二年。戦前の京都の路地の子どもたちを描いた連作短編集。『手品師の庭』以下八編を収める。狭く、貧しい裏町を脱出したいという子どもたちの願望と、それを阻む状況と

が描かれる。象徴的表現の多用に特徴がある。『星へ行つた汽車』ほかでは、作中に、ファンタジーと現実が不思議な同棲をしている。日本児童文学者協会賞など五つの賞を受けた。

(宮川健郎)

安野光雅

(みづまさ)

一九二六~(大15~)画家、絵本作家。島根県津和野町に生まれる。山口師範研究科卒業。徳山で小学校教員を務めた後、画家をして上京。その後パリに渡り、エッシャーの本に影響を受けた。『ふしぎなえ』(一九六八)、『さかさま』(六九)などトポロジーの面白さを発揮した作品や、『野の花と小人たち』(七六)、『歌の絵本』(七七)など柔らかな抒情性に包まれた作品、『はじめてであうすがくの本』(七二)、『美しい数学―集合』(七四)など数的世界に関する作品など、幅広い作品で活躍。常識を破った視点によって、独特のイメージをつくりあげ、絵本世界に展開する。一九七四年度芸術選奨文部大臣新人賞『ABCの本』(七四)、『昔話きりがみ三部作』(七四)をはじめとして、ブルックリン美術館賞、最も美しい50冊の本賞、ポストン・グローブ・ホーンブック賞、ケイント・グリーナウェー賞、B.I.B金のリング賞、ボロニア国際図書展グラフィック大賞など、国内外で多数の賞を受賞。主な単行本は、ほかに、『ふしぎなサーカス』(七一)、「あいうえおの本」(七六)、「あけるな」(七六)、谷川俊太郎文)、「旅の絵本」(七六)、「天動説の絵本」

(七九)、『空想工房』(七九)、『津和野』(八〇)などがあり、日本のみならず欧米においても高く評価されている。

【参考文献】村松武編『安野光雅』(一九七七 すばる書房)

(長戸優子)

イ

飯沢 匡 一九〇九～(明42～) 劇作家、

演出家、放送作家、小説家、評論家。本名伊沢紹。伊沢修二の甥。父、伊沢多喜男の任地和歌山に生まれ、東京で育つ。武藏高校を経て一九三三年文化学院美術科卒業。朝日新聞社入社。「婦人朝日」「アサヒグラフ」編集長を歴任、五四年退社、客員となる。劇作家としては三三年『藤原閣下の燕尾服』でデビュー、戦争中の『鳥獸合戦』(一九四七)などの戦争批判の風刺劇を書く。代表作に『二号』(五五)、『五人のモヨノ』(六七)、『もう一人のヒト』(七〇)など。貫して笑いの中に鋭い社会風刺の精神を込めた作品を執筆し、本格喜劇の

第一人者として活躍する。子どものための仕事も多く、ラジオでは『ヤン坊ニン坊トニン坊』、テレビでは『ブーラー』『どんだけブッヂー』などが好評を博した。

また、童画家の土方重巳らと組んで人形絵本を数多く制作した。児童文学としては『ぼろきれ王子』(七二)などがある。著作集に『飯沢匡喜劇集』全六巻(六九～七〇)、『飯沢匡狂言集』(六四)、代表的著書に『芝居一見る・作る』(七二)、『武器としての笑い』(七七)、小説に『近くで遠きは』(五六～五七、毎日新聞)、『帽子と鉢巻』(五八)、美術評論に『異説「円空」論』(六五)、『反骨の絵師 歌川国芳』(七二)、『脱俗の画家 横井弘三の生涯』(七六)などがある。ほかにエッセイ集なども多い。自伝『権力と笑のはざ間』(八七)がある。日本芸術院会員。いわさきちひろ絵本美術館館長。(松本 猛)

飯田彦彦 一九四四～(昭19～) 児童文

学作家。福岡県甘木市生まれ。県立朝倉高等学校を経、早稲田大学教育学部国語国文科卒業。アルバイトをしながら創作に励み、一九七二年『燃えながら飛んだよ!』で講談社児童文学新人賞を受賞。歯切れのよい文体、ユニークな発想による物語の面白さが評価された。それは『飛べよ、トミー!』(一九七四 野間児童文芸賞推奨作品賞受賞)などにも引き継がれる。老人問題を取りあげた『おじいちゃんはとんちんかん』(七九)、筑豊の子どもを主人公とした『かぜのおくりもの』